

## 8. 増林の養鶏業の歴史

山本 泰秀

増林地区で養鶏が始まったのは、昭和初期である。当時は、一戸当たり五十〜六十羽ほどを放し飼いにする平飼いであった。昭和七年頃、雛を扱う孵卵場ふらんが愛知県にでき、雛鳥を購入し飼育するだけになった。昭和二十四年頃は、一戸当たり二百〜三百羽ほどになった。同年木造三段式バタリー（鶏舎）が生まれた。鶏飼育羽数が各段に増加、副業的体系から大規模大企業体系に移行し計画的育雛いくすうとなった。大相模在住の斎藤亀之助氏が発明したバスケットブルーダーと言う育雛器が大きく貢献したのも事実である。灯油による灯火方式の育雛器は、孵化したばかりの雛は自分で体温調節ができないから、これを補給する目的で作られたものであるが、それ以上に雛が育つていくうえでの問題点、例えば雛の呼吸により発生する炭素ガスの充満を防ぐことができた。バスケットブルーダーは金網製且つ引き出し式で上下段入れ替え可、雛を捕らえるにも簡単便利であり、餌及び水飲み器が外付けで無駄がない。糞も金網を通じて下の糞受けに落下堆積し引き出し除去でき、伝染病感染の心配も少なくなった。高層階段式のもは、一人で五千羽もの管理が可能になった。

初期の飼料は各家庭で米糟こめかす・麦糟・トウモロコシ・野菜・魚粉を釜で煮炊きして作った。昭和三十八・九年頃、配合飼料に変化。円筒形の倉庫、いわゆるサイロがこの地区にも多く見られた。自家飼料を作る労働時間は短縮できたが、飼料費が嵩み、やがては採算が取れず養鶏をやめざるを得なくなった。二十九年の東京オリンピック効果で一時的卵価格高騰があり、四十年頃までは、当時の農家二戸に一戸が養鶏組合員であった。四十一年十一月ニューカッスル病が大発生。四十五年頃を境に経営件数が減少、転業する農家が増えた。卵価格の低下、さらに越谷の都市化に伴う公害、土地価格、労働力問題も重なり、増林中組における養鶏農家は、昭和五十年頃には、皆廃業してしまった。最後まで養鶏を続けていた尾川佐平家も平成七年一月で完全撤退し、ここに増林から養鶏業が無くなり、一大産業が完全消滅してしまった。